
魔法の国のティカ

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の国のティカ

【Zコード】

N2177BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

佐藤千花（16）はどこにでもいる普通の女子高生……のはずが、ある日突然、自転車ごと魔法大国ガルディアに異世界召喚されたまま膨大な魔力を宿していた振り回され体質の主人公が魔術師の弟子になって、なぜか城でお姫様生活をしたり、自転車で異世界観光したり、ツンデレ師匠の束縛紛いの監視の下、王子や騎士達に囮まれてうろたえたりする、ちょっと非日常な異世界生活を綴ったファンタジー・ラブコメディ。

〇〇 わたしのハゲ抹茶

「あー、アイス食べたい。アイスアイスアイス
残暑厳しい夏休み。

佐藤千花は無性に高級アイスが食べたくなつて連呼した。

今外に出たら暑いだろ? あー、でもアイス食べたい。

少しばかり迷つた後、結局千花は近くのコンビニまでアイスを買
いに行くことにした。

「千花ー、どこ行くのー?」

一階の部屋から階段を降りていくと、リビングにいる母親から声
をかけられた。

「ちょっとコンビニにアイス買いに行つてくる」

「それなら、ついでにいちごのかき氷買つてきてよ」

「うん、分かった。行つてくるね」

千花は頷くと玄関を出る。

「…………あつづ……蝉づるやー…………」

文句を言いつつ、軒下に置いてある自転車を取りに行く。
照りつける太陽の下、自転車を漕いで三分ほどコンビニに着く
と、千花は目指す高級アイスとかき氷を手に入れた。
自転車のかごにコンビニのビニール袋を放り込むと、千花はアイ
スが溶けてはかなわないと速攻で自転車を走らせる。
すると、目の前にきらきら光るもののが見えてきた。

やだ、ガラス? 避けないとパンクしちゃう。

千花はその場所を避けようとハンドルを斜めに向けようとしたが、
なぜかそれが出来ずに自転車は直進する。

「ええ？」

今度はブレーキを思い切り握った。……がそれも効かず自転車は更に加速した。

「うええ！？」

思わず千花の口から素つ頓狂な声が漏れる。

なにこれ、チャリ壊れた！？

自転車はきらきら光るものに当たるとこきなり停止した。

「おおおっー？」

放り出されるかと思つて、千花は女子にあるまじき声を上げる。しかしその衝撃はなく、真下にあるきらきら光るもののがいきなり円を描いた。

次の瞬間には光の洪水が来て、千花は思わず叫んだ。

「な、な、なにこれーっ！」

光の洪水が治まる、千花はまったく見知らぬ場所にいた。それも、どう見ても室内。

千花が呆然としていると、田の前の淡い金髪で水色の瞳の男は自転車のかごからコンビニ袋を取り出した。

緩く波打つ背中の中程まで長髪。顔は超絶美形と言つていいと思う。千花が今までお田にかかつたことがないような美形だ。けれど、この衣装はなんだろう。まるでファンタジー映画に出てくる人のようだ。

千花がぼーっと見とれないと、超絶美形はおもむろにアイスを食べ始めた。そこでやつと千花ははつと気づく。慌てて自転車のスタンドを立てる男に向かつて叫んだ。

「ちよつ、わたしのハゲ抹茶！ 勝手に食べないでよー！」

「禿マツチヨ？　おかしな名前だな。もつ一つあるだりつ、それを食べる」

「なんであんたに指図されなきやいけないのよ、禿ドロボーー！」

楽しみにしていたアイスを奪われ、更に上からの男の物言いに千花は頭に血が上る。

「おまえは目がおかしいのか？　俺は禿げてない。……ああ、頭がおかしいのか気の毒にな」

「なんですってえええっ」

あまりの言われように、千花は思わずきいにいと叫びたくなる。

「いらないのならそちらも俺が貰うが」

「！　食べる、食べるわよっ」

千花は慌てて男からコンビニ袋を奪い返した。そして溶けかかつたいちごのかき氷をかきこむ。

「う

頭にきーんと衝撃が来て、千花は思わず呻く。

「やはり馬鹿だな」

心底馬鹿にしたような男の表情に千花はむかむかした。

「ひるむことよ！」

一聲叫ぶと千花は目の前のかき氷にとりあえず集中することにした。

かくして、室内には不似合いなママチャリを挟んで、見た目ファンタジーな男と千花がアイスとかき氷を食べているというおかしな構図が出来上がったのである。

千花がかき氷を食べていると、四十代ほどの男性が室内に現れた。なかに突然出てきたような気がするのだが、千花の気のせいだろつか。

『カイル、召喚魔法をやたらと使うなと言つたはずだが。またおまえは使つたのか』

千花のアイスを奪つた男に文句を言つてゐるようだが、なんとしゃべつてゐるのか千花には理解できない。

「……誰？」

短い茶髪に青い瞳。また外人だ。この人もファンタジー映画のような格好をしている。

いや、それ以前にここはどこなんだ。悠長にかき氷なんぞ食べている場合じやなかつた。

千花の疑問には一人は答えず、勝手に会話が続いていく。

「……師匠は弟子を取れと言つた。だから、召喚魔法で魔力の強い者を喚び出した」

「はあ？ 召喚魔法つてなによ？ ファンタジー小説とかゲームじやあるまいし」

いくら田の前の男の格好がファンタジーでも、言つてることまでそんなことつてある？ ……もしかして危ない人？

そんなことを考えて、千花が田の前の男から更に距離を取る。

『……なにを言つてるのか分からんな。ひょつとして異世界の者か？』

「せうだ。ここより科学が発達している世界の者だ」

千花の質問を無視して田の前の男と壮年の男の会話が進む。

『……おまえ、なんてことをしてくれたんだ。異世界の者を召喚しただと。今すぐ帰すんだ』

「そういうわけにはいかない。この娘には、俺の弟子になつてもら

わなければ

「弟子つてなによ？ なんでわたしがあんたの弟子にならなきゃいけないの？」

弟子つて、なにかの伝統芸かなにかだらうか？

なんにせよ、アイスを奪われた恨みは深い。こんな男の弟子なんて、千花にはまっぴらごめんだった。

「後で説明する。おまえは少し黙つてろ」

「なつ」

そつけなく男に一蹴されて、千花は氣色ばむ。

『この娘にも家族や友人はいるだらう。それをじからうの勝手な事情で引き離す訳にはいかないだらう』

「しかし、たぐいまれな魔力の持ち主である」とには変わりはない。もう決めたんだ。俺はこの娘を弟子にするぞ

「魔力つてなによ？ 勝手に人を弟子に認定しないでよ」

「黙れ」

男が千花に手のひらを向けると、なぜか彼女は話せなくなつた。
な、な、なによこれーつ！？

千花は驚愕に口をパクパクさせる。

『……仕方ないな。おまえが言い出したらどんなに反対しても無駄だとは分かっている。だが、こんな大きな娘を弟子にするのはいろいろ問題があるぞ』

「とりあえず、この娘の部屋は用意する。それでいいだらう。」

『分かった、それでいい。……ああ、その娘の難民登録をするのを忘れるな』

「ああ、分かつた」

よく分からぬが話は付いたようだ。

それならわたしにも分かるよつに話して欲しいものだ。そう思つて、千花は二人をじつと見る。

『言語疎通の指輪を渡した方が良さそうだな』

壯年の男が腕を掲げると、その手のひらに指輪が出現する。

なつ、なにあれ？ なにかの手品？

壮年の男が千花に近寄つて左手を取ろうとしたので、慌てて彼女は後ろに後ずさった。

しかし、男がなにかを呴いたとたん、体が動かなくなつて千花は焦る。

な、な、なんだこれーー！？

男は動けない千花の手を取ると、左手の中指に指輪をはめた。

「これで我々の言葉が分かるだろ。……カイル、この少女の沈黙魔法を解け」

あれっ？ 話が分かる！

千花が驚いていると、カイルと呼ばれた青年が彼女に向かつて短くなにかを呴く。

「……ちょっと、ここはどこなのよーー！？」

話せるようになつたとたん、カイルに千花は叫んだ。

「……もう少し、黙らせておいた方がよかつたか？」

「そう言つわけにもいかないだろ。少なくとも我々には説明責任がある」

うんざりした口調のカイルに壮年の男がカイルの肩に腕を乗せて苦笑する。

「……ここは、オルデリード大陸、ガルディア王国。首都のルディアだ」

「は？ 聞いたことない名前なんだけど」

「それはそうだろうな。おまえからしたらここは異世界だ」

「いせかい。異世界。異世界！？」

「あははは、冗談きついわ～」

千花は笑い飛ばしたが、目の前の二人はいたつて真面目な表情だ。

「……すぐには信じられないのも仕方ないだろ」

壮年の男がなにかを呴くと、景色が一変した。煉瓦色の屋根が遙か下に見える。

「ちょ、うそつ！ 足、体浮いてるつ」

「ここが中央ルディア市内だ。……おまえ、うるさいぞ」
カイルが眉を顰めるが、地に足が着いていない状態というのは不安なものだ。

「し、仕方ないでしょ。この状態で静かに出来るかつての…」「まあ、そうかもしけないな。だが、落ちないから大丈夫だ」

壮年の男が苦笑すると、一点を指さした。

そこには立派な白い城。その城を中心としてヨーロッパのような古い町並みが円を描くように取り囲んでいた。

「なにあれ、もしかしてお城？ ここはヨーロッパかなにか？」

「もしかしなくても城だが、おまえの言つようになヨーロッパというところではない」

カイルが千花の疑問を軽く否定する。

「それじゃ、新しいテーマパークかなにか出来たの？」

それにしてはすごい規模だ。日本一大きいと思われる某テーマパークを軽く上回る。

「あれはガルディア城だ。この国の中心。魔法大国の顔もある」
壮年の男が真面目に説明してくれるが、どうしても違和感が残る。
「さつきから魔法、魔法つて……、おかしいんじゃないの、あなた達」

「じゃあ、今浮いているのはなんだ？ サつき室内から移動してきたのは？」

「えー……、手品？」

千花が苦し紛れにそう言つと一人は頭を抱えた。

「ここまで見せて理解できないとはおまえは馬鹿か？」

カイルが心底呆れたように言った。

「なつ、失礼なこと言わないでよね！」

「待て、二人ともとりあえず戻るとしようか。これでは埒があかな

い」

「……ああ、そうする」

カイルが手を振ると、さつきの場所に戻ってきた。

「あ、あれ？」

「これが移動魔法だ。いい加減理解しろ」

千花が首を傾げているとカイルが冷たく言い放つ。

「この娘の場合、理解したくないというのが正解のようだがな」

「……ならば、理解させてやるまでだ。おいおまえ、名はなんとい

う

偉そうに言われて、千花はカチンとくる。

「人に名を尋ねるのなら、まず自分から名乗つたらどうよ？」

「……なんだと。まあ、いい。俺はカイル。カイル・イノーセ

ン。魔術師だ。こちらにいるのは俺の師匠でシモン・ガーランドだ

魔術師？ やつぱり鳩とか出すあれじやないの？

「わたしは千花。佐藤千花だよ。そちら風に言えば、千花・佐藤かな

な

「ティカ・サトー？」

「ティカじゃなくて、千花！ ちゃんと発音してよね」

「……悪いが君の名前は、この大陸の人間には発音しにくい。良ければティカと呼ばせてもらつていいかな？」

カイルに比べれば大分人当たりのいいシモンに言われて、千花は不承不承頷く。

なにか納得できないが、発音できないのならば仕方ない。

「まあ、それならしようがないけど」

「弟子のくせに偉そうだな、ティカ」

「あんたに言われたくないし！ 第一弟子ってなんのことよ」

「おまえには俺の話は聞こえていたと思ったが。おまえの頭はスポーツジカ？」

「……そこまであんたに言われる筋合いはないんだけど？」

ビキビキと千花の周囲の空気が凍る中、シモンが慌てて言い繕つ

た。

「カイル、おまえは口が悪すぎるぞ。ティカ、この男は言葉は悪いが腕だけは超一流だ。弟子としてそれだけは安心していい

た。

「とりあえず、おまえが俺の弟子になることはもう決定事項だ。おまえは家に自力では帰れないしな」

「……なんですか？」

到底看過できないことを言われて、千花は挑戦的にカイルを見上げた。

「召喚魔法でおまえをかの世界から呼び寄せた。どうしても帰りたいなら召喚魔法を習得してから帰れ。俺ですら習得に何年もかかりた高等魔法だがな」

「ちょっと、勝手なこと言わないでよ！　わたしはあなたの弟子になるなんて一言も言ってないわよ！　わたしの意思はどうなつちやうわけ！？」

「はっきり言えばない」

きつぱりとカイルが言つと、シモンが肩を竦めた。

「……こんな男だから、この際、諦めてくれ」

「第一、師匠が城に仕官できなければ弟子を取れと言わなければこんな面倒なことせずにすんだんだ」

「俺のせいか？　まさか召喚魔法で弟子を呼びだすなんて普通思わんだろう」「う」

シモンが少し情けない顔になる。

千花は今までの一人の話を思い返しつつ、なんとか話を理解しようと努めた。

「……えーと、話をまとめると、こりは異世界でカイルがわたしを召喚魔法とやらで呼びだしたわけね？　それで、その理由は弟子を取りこんだつたと」

「ああ、そうだ」

千花の確認に、カイルがあつさりと頷く。

「それで、わたしが召喚魔法を習得しないことには家には帰れないつてことよね？」

「やつじうことになるな。まあ、諦めろ」

諦めろと言われて、そう簡単に諦められるかつての…

「そ、うなんだー。ふふふ」

千花はやたらとふふふと笑うと、不気味がるカイルにおもむろに近寄る。そして彼に向復ビンタを思い切りお見舞いした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177ba/>

魔法の国のティカ

2012年1月5日20時52分発行